

# 蔵書調査から見えてくる文芸享受の風景

## ——身分社会における自己存在証明の視点から——

井 上 泰 至

はじめに

軍書は、軍学・記録・教訓・娯楽・考証といった多様な顔を持つ、実に雑多な性格の書物群であり、その雑種性故に近世文学の外縁に位置しながら、それ自身、読み物として、あるいは小説・演劇等に主に歴史の方面から養分を送り続ける役割を果たした。蔵書調査という観点からすれば、どこにでもある普通の本である。刊行軍書については、その沿革をまとめることができた<sup>(注1)</sup>が、厳しい情報統制の対象となった刊行軍書からはみ出た広漠たる写本軍書の世界がある。その全体像をつかむことすら覚束ないが、写本も対象に含めながら、造本・蔵書・読書とその身分的位相という観点から報告したい。歴史学では共通理解となっているが、江戸の支配体制は武士による軍市政権であり、支配機構も軍事的論理がその背景の多くを占め、「武威」こそが権力の源泉であった<sup>(注2)</sup>。その意味で、戦のことを取り扱った書物一般の意味から、狭義には軍語りの書を意味するようになる「軍書」は、江戸の蔵書の核と

言つてよく、それを「身分」の観点から検討することは、江戸時代における書物の役割の重要な側面を明らかにすることにつながるはずだからである。

### 1 蔵書の身分的位相

#### 1・1 大名の場合

#### 秘匿による権威化

八戸市立図書館には、読本の名品が残ることで知られる旧八戸藩南部家の蔵書が収められるが、大名蔵書の御多分に漏れず、軍書がその核をなす<sup>(注3)</sup>。

軍書が「蔵書」として集積されると、どういう機能を持つようになるのか。八戸には『御家流御書籍目録』という、甲州流の軍書を集めた写本群の目録が残っている。横本で台帳の体裁を取るその目録の冒頭を少

し紹介すると、

#### 半免

智信公	一	甲陽軍鑑末書伝	三冊
同	一	一騎士之巻	全一冊
同	一	信玄流騎士之巻	全一冊
同	一	軍法之巻秘説集	全一冊

といった按配で、五代藩主南部智信（信興）の書写した書物が核となり、「半免」二七点（うち智信写七点）、「本免」一三三点（智信写十六点）、「中印」十六点、「印可」二五点、「題分難定御書籍」八十点（智信写十点）、「道統江源書」二点（智信写一点）、「御流儀ニ無之御書籍」十四点（智信写一点）に分類される。すなわち、甲州流軍学の「御稽古」の階梯を踏まえた分類を基本とし、藩主の写本を多く含むことにより権威づけられた、まさに「御家」の「軍学」の書籍群であったことが見えてくる。

先行研究<sup>（注4）</sup>によれば、延享二年（一七四五）甲州流軍学を藩の「御家流」とすることが藩の方針となった由で、盛岡藩士星合安明→八戸藩士中里正康→八戸藩士森高康→五代藩主南部智信といった経路を経て、本藩盛岡から、八戸藩内随一の有力家臣中里氏を介して、甲斐源氏の子孫を称する南部家にふさわしい軍学が、定着したことがわかっている。ちなみに、先の「御家流御書籍目録」の副本の表紙には「嘉永七年

甲寅年」「委細ハ九月五日同十七日之日記ニ有之」と書き込まれ、同じく八戸市立図書館に残る数ある藩政日記の中から、「八戸藩用人所日記」の嘉永七年九月五日の項に当たると、

一 中里弥右衛門より左の通伺へ申次覚  
此度師範封印之儀、御流儀御書籍風干被仰付候に付、為引合封印  
外御書籍共に不残御下被成候。（以下略）

などとある。この目録が「風干」即ち、曝書の際に照合のため書き留められたもので、続きを読むと、書籍になされていた「師範封印」を切つて、その十七包と書籍を共に丁重に長持に入れ、管理者の中里へ送るよう依頼したことが明らかになる。この書籍群は「封印」されるほどの「権威」を有し、それを中里家歴代が保管することで、その権威を保ち続けた事情も浮かび上がってくる。

つまり、書物が集積され、厳重に保管され、時にその秘伝が相承されていくうちに、「御家」の貴種と武威が形成され、保障されていくからくりが見て取れ、こういう蔵書と管理の在り方もまた、写本軍書の機能を物語るものだったのである。和歌の伝書に通じるものを感じるのは私だけではないだろう。

軍書のこのような秘匿による権威化については、中世にまでその類例を遡ることができる。「平家」語りの琵琶法師が中世に座組織を形成し、「平家」正本の作成と伝授が行われると、正本は秘蔵・秘匿される

ことで、その機能を果たすようになる。ただし、転写を禁じられた正本の伝来で注目されるのは、足利義満に献上された事例で、それは摂津大覚寺文書記載の覚一本奥書から知れるのだが、こうして当道、即ち琵琶法師の同業者組織の支配権は足利將軍家にゆだねられ、平家一門の滅亡の物語、即ち源氏將軍家の草創・起原を語る神話を管理することで、源氏將軍家の神話的起原が芸能によって伝承されていくのである<sup>(注5)</sup>。

八戸の事例は神話的起原を軍書の管理・秘匿に求める点ではこれと同じだが、それが「平家」語りの芸能ではなく、量的に格段に多い蔵書と、大名自身の「稽古」によって權威を生じさせようとした点が異なる。この蔵書の機能こそが、近世性と言ってよいだろうか。板本による大量の書物の流通こそは近世期の大きな特徴だが、それは写本にも及んで「蔵書」の意識を形成させ、武家の權威を生成・保持する方法となつていった点をここで強調しておきたい。

### 系譜の登録

もちろん、写本軍書には実用的な機能、即ち、御家の来歴と武功を証拠立て、当代までの系譜を、武家の歴史の中で位置づける機能もあった。佐賀県市立図書館の鍋島文庫は、佐賀藩主鍋島家の「御手元」の蔵書群で、やはり写本軍書を多く所蔵し、板本軍書が多く残ることの多い旧藩校蔵書とは区別して考えるべき性格のものだが、そこに明治三年（一八七〇）八月に書かれた『御蔵書目録』が残る。大量の書籍を残す旧大名家が、明治維新を迎えて、宝物や貴重書の一部を売り払うなどす

ると同時に、蔵書の登録をした結果残る目録は各地で見いだせるが、この目録の第一冊は、そうした便宜的な機能に留まらず、明確な分類意識を持つて蔵書の整理・登録を行う希なケースなので、興味深い。さて、その分類を略述すると以下のようなになる。

- 一番 大日本史・皇朝史略・神皇正統記・続・日本政記・日本外史・…・征韓偉略・…・家忠日記・…・東照君御遺訓・…・三河物語・関原物語・…・岩淵夜話・…
- 二番 統藩翰譜・同拔書・良将達德抄・…・常山紀談・…・兵家茶話・…・老人雑話・…
- 三番 「経世書・農書」 和論語
- 四番 「和歌・名所集」 万葉集略解
- 五番 「経書」 四書纂疏
- 六番 「中国の史書」 春秋左伝補注
- 七番 「隨筆・名言集」 孔子家語
- 八番 「和漢の詩文集」 唐宋八大家読本
- 九番 「兵書」 武経七書
- 十番 「対外情報」 西洋紀聞

三番から十番の「」内は私に記した分類名であり、その下の書名は、その番の最初に載る書名である。ざっと見渡して、「経・史・詩・集」という東アジア文化圏における伝統的図書分類からはみ出るのが、

一番・二番の、武家の歴史を通覧できる書物群とそれに準じる武家説話集や各藩の家譜・家記・遺訓類、それと九番の兵書・軍学書とその延長線上にある対外情報を集めた風聞・聞書集である。

特に一番・二番の蔵書分類は、皇帝と科挙によって採用された官僚によって政治を動かす中国・朝鮮ではありえない分類意識であり、一番の最初に水戸学系の史書が挙げられるのは、明治維新の王政復古を意識した編成であるが、大半は江戸以来の写本の歴史読み物たる軍書が占めているのである。これらの書物は、武家の家格とその根拠を登録し、証拠立てる書物として「実用的」だったのだ。

しかし、歌道や芸能の伝書のように取り扱われようと、歴史の証文として文書資料の核に据えられようと、武家の「権威」に奉仕する機能に変わりはない。それが大がかりになっていけばいほど「権威」は増すというものである。

以前に述べたことだが<sup>(注6)</sup>、『寛永諸家系図伝』は、寛永十八年(一六四一)將軍家光の命によって事業が開始され、太田資宗・林羅山・鷲峰らによって編纂された大名・旗本らの系譜集で、二年後完成して献上されているが、これは諸大名に自家の歴史の報告を課したものであり、それによって徳川氏制覇の過程と諸家の系譜・武功を明らかにして、武家全体の家格を整理することを目的としていた。林鷲峰は本格的な史書『本朝通鑑』の編纂事業には腰の重い幕府が、寛永譜のような武家の権威に直結する事業には大変意欲的であったことに不満を漏らしているが(『国史館日録』寛文四年(一六六四))、それはスポンサーの武

家側からすれば当然のことであつたろう。

さらに寛永譜の編纂事業は、結果として、各藩における自家のアイデンティティーの確認を促し、軍記・記録・文書の蓄積をも促した。ここにも芸能でなく蔵書が、武家の権威を保障する、極めて近世的な性格の機能が浮かび上がってくるのである。

## 1.2 地方名家の場合

### 身分への執着と知的リーダーの役割

武家ばかりではない。本来地方名家では、大名家に比べて軍書のまとまった蔵書が少ないが、かといってそれは決して読まなかったわけではなく、板本写しや刊行軍書をほぼ網羅したカタログ『和漢軍書要覧』(明和七年(一七七〇)刊行)だけは残っていたりするので、貸本で読んでいたことは十分想像されるケースがある。しかし、多くは大名家ほど、権威の根拠として蔵書をなさうという痕跡はなく、むしろ矢口丹波記念文庫<sup>(注7)</sup>や三島市郷土資料館勝俣文庫のように、実録の方をまとまって残す場合がある。軍書の中の、もっぱら娯楽の機能がこの階層には働いていたからと想像できる。

ただし旧武家階層を強く意識する郷土の場合は武家に近い蔵書形成をなしている場合がある。甲斐国下井尻村「牢人百姓」依田長安は、武田・豊臣・徳川に仕えた武士であったことを自称、父の代でその兄弟の多さから帰農し、「牢人百姓」となつたと書き残している(『由緒書』)。

すなわち、本来は武士の身分であることに強い矜持を持ちながら百姓身分に甘んじた典型的な郷土層であり<sup>(注8)</sup>、それに近い身分意識を持った人物を、近世文学の有名どころから探せば、芭蕉や馬琴などがすぐに想起される。

依田による財産目録の一部、享保十五年（一七三〇）の「書物目録」は全六四部中半数以上が軍書、および浮世草子の武家物で構成され、蔵書の中核をなす。軍書は、「日本王代一覽」を筆頭に「前太平記」「前々太平記」「保元物語」「平治物語」「平家物語」「源平盛衰記」「義経勲功記」「北条九代記」「太平記」「後太平記」「本朝三國志」「信長記」「太閤記」「甲陽軍鑑」などは時代順に武家の棟梁を中心にした歴史が読める配列で登録されている。大名蔵書から比べれば、片々たる板本の集積に過ぎないが、その身分意識から軍書を集め配列する意識は、大名家のそれと本質的に変わらない。

こうした軍書類をベースに、家譜・家記を編纂し、そこには武名・家名の粉飾・捏造がまみえられるのもまた、大名家同様である。すなわち、依田が編纂した自家の「由緒書」は、依田家を頼朝以来の武士の家として伝えるが、それを証明するいくつかの古文書は、偽文書として疑われている<sup>(注9)</sup>。大名家としてその事情は大同小異で、例えば、貝原益軒の編纂した『黒田家譜』につけば軍書類の記事を繋ぎながら、朝鮮の役・碧蹄館の戦いにおける黒田長政の武功などはかなり粉飾されていることがうかがえるのである。

令名への意識は、家の内実を守るための教訓への関心にもつながる。

依田が記した写本『依田家訓身持鑑』は、『北条九代記』や『太平記』から教訓となるエピソードを引用して、礼儀・儉約・無欲を説く。『北条九代記』巻六「武蔵守泰時廉直」からは、数多い兄弟に財産を分配する泰時の事例を引いて、長男の無欲とそれによって兄弟相和すべきことを説き、同書巻八「相模守時頼入道政務付青砥左衛門廉直」からは、松明代五十文を使って十文銭を探した青砥藤綱の説話を引いて儉約を説き、さらに『太平記』巻三五「北野通夜物語」からは、北条泰時が明恵上人から治者の無欲を説かれるくだりを引用する。

つまり、これらは武家やそれに準じる階層の支配の根拠を、周囲から尊敬される人格に求める意識から、軍書の権威を使って成した書物なのである。これが、実際の武家身分ともなれば、語り伝えられた大名・将士の逸話を集成して、藩内での奉公に関わる教訓をなした、やはり写本の「葉隠」<sup>(注10)</sup>あたりを想起すればよい。また、上層町人の階層に目を移せば、江戸中期からの社会矛盾に対処すべき経世論に、『太平記秘伝理尽鈔』以来の仁政家楠正成像を使った安藤昌益の例<sup>(注11)</sup>も想起できよう。

特に十八世紀における在地の知識人層の役割については、史学のデータが積み重なってきており、参照すべきである。この時期には幕府・藩権力と百姓との中間に位置する階層が確立し、民間社会に対峙して、政治的力量を果たす末端としての役割を果たすことが求められていた。これにからんで書物の大量の普及により、在地でも知的水準が上がり、場合によっては身分を超えた一定の共通概念・認識が蔵書のかたちで形成

されていったとされる<sup>(注12)</sup>。

さらに言えば、依田の「書物目録」に搭載される軍書類は、浄瑠璃・歌舞伎の時代設定「世界」を集約した『世界綱目』における各世界の「引書」とほぼ重なる点が興味深い。先に紹介した矢口家のように、軍書・実録と共に浄瑠璃本を所蔵する地方名家も少なくない。浄瑠璃本では、概括的に言って「平家物語」「太閤記」「難波戦記」その他、軍書・実録に取材した時代物が多く残り、地域的に言っても軍書同様、全国に万遍なく残ることが報告されている<sup>(注13)</sup>。それらの事実は何を意味するのか。

すなわち「世界」で構成された歴史観は、ひとつの秩序世界を成すもので、それが劇中の葛藤を経て、回復される予定調和を保障するものだとするならば、その倫理観および、それと関連する時間意識と軍書との関係は検討されるべき重要な課題であるだろう。より具体的に言えば、時代は異なっても、御家の不調に付けこむ悪人の跳梁と、主人公の義勇・忠節・知略による安定の回復という時代物浄瑠璃におけるパターンは、軍書の中にその芽があったのではないか。さらに写本としては、実録が似た形で予定調和を繰り返していたのではないかという、大きな問題を我々に投げかけるのである。

## 2 読書の身分的位相

### 2・1 刊行軍書

一般に板本の軍書は音読が前提であった。

妹に軍書読まする夜長かな 子規（明治二六年（一八九三））

妹律の優しい声に似あわない軍書の読み聞かせが、この俳句の趣向だとしても、軍書が音読するものであるという常識を前提にしなければ、その趣向も成り立たない。江戸時代の証言を引こう。『鶴峰林学士文集』（巻百二十「読北条九代記」（原漢文））によれば、鶴峰は、「侍史」に「北条九代記」を読みあげさせて、その出典を以下のように考証しつつ、史書としての杜撰を指摘している。

最初の段専ら職原抄の一条に倣ふ。頼朝・時政より宗尊・時宗の初に至るまでは、則ち東鑑に據て百が一を記して、元亨釈書を附会す。惟康・時宗に至るまで、増鑑・保暦間記に據て、而して我が將軍譜・王代一覽も亦採拾の跡自から見ゆ。（中略）中に就て、承久乱後、後堀河帝を誤りて後嵯峨帝とし、泰時再び帝統を定るの大掌を漏す。其の餘載すべき者、之を載せず、略すべき者、之を略せざらる、猶焉有り。国史に熟する者は披覽すといへども、益とするにた

らず。国史に疎き者は之を見るも亦己に賢らんか。丙辰孟秋残暑納涼の夕、侍史をして之を読ましめて跋を作る<sup>(注14)</sup>。

これは『北条九代記』の分量から推して数日をかけての読み聞かせであつたと想像される。

紀州藩家老の三浦家に入りし医者石橋生庵の日記『家乗』につけば、長編歴史読み物の通俗軍書は何日もかけて読み聞かせが行われている<sup>(注15)</sup>。寛文・延宝期(一六六一〜八二)から、刊行軍書は、各巻の目録・目次の各章段下に丁数を明記するなど、板本として整備されてくるが、それはインデックスとして重要であつたろう。

また、音読に供するため、武将の出で立ちや、焦点となる行動は、何度と同じ修辭が繰り返され、イメージの定着化が働くよう工夫されていたことも、織田信長と斎藤道三が会見する正徳寺一件をめぐる、写本軍書『増補信長記』(松平忠房編、寛文二(一六六二)年成立)と『総見記(織田軍記)』(遠山信春編、元禄十五年(一七〇二)刊)との比較で報告した<sup>(注16)</sup>。刊行軍書は、音読の方面から見て広義の意味での「読本」だったのであり、現行文学史における歴史小説集としての「読本」の時代設定の素材としてのみならず、「音読」文体の小説の源流として、浄瑠璃本とともに記憶されるべき書物群でもあつたらしいことは、今後とも注意して考えるべき問題だろう。

先に指摘したように、地方名家にあつては、カタログである『和漢軍書要覧』や板本写しだけが残っていたりする事実は、この階層の読書が

娯楽に傾斜していたことを想像させる。

## 2・2 写本

では写本はどうか。一つは記録として残す意識が当然ある。特に関ヶ原に関する軍記は、江戸の武家のほとんどがその戦功にかかわる戦いであるが、徳川家についての情報を刊行しにくい出版規制上、主に写本で広がった。これらの書物は、旧大名家、あるいは旧藩校の蔵書に多く、先に蔵書の節で述べたように、御家の系譜と位置づけのため、記録として知的保存のため、書写された。

しかし、より個人的な読書ということになれば、実録(「書本」)が焦点化される。地方名家にあつては、先に指摘したように地域のリーダーの役割を求められ、その実用性や情報が、このジャンルとは密接に関わっていると想像される。高崎矢口家の場合、蔵書総数一六三五点のうち写本は九三三点の多きを占め、筆写の日時と筆写者を明記した奥書が付されているものが四九九点もあるので、貴重であるが、例えば、『和州小泉敵討親子塚』の奥書には、「天明四甲辰歳三月十五日ヨリ同十七日朝五時筆止」とあつて、大本一冊四八丁の分量である。筆写のスピードは、二日から数日が基本かと想像され、早い場合で一冊の本を一日で筆写する<sup>(注17)</sup>。この筆写は若い時代から生涯かけて行われているが、青年期に実録が集中していることは、読み物としての嗜好の他に、一つ書きの書状や布告が登場する実録を筆写することは、地方名家の跡取り

として必須の教養を身に着ける意味もあったことを想定させる。同様の環境でやはり若い時期に実録筆写を行った三島勝侯家の例も、その状況証拠となろう。

これも既に述べたことだが、矢口家の場合、文化露寇の情報や大黒屋幸太夫のロシア流離の情報を書き留めた写本も残っており<sup>(注18)</sup>、情報収集という意味合いも写本のなかにはあったことは申し添えておきたい。

### 3 美と礼節の絆―漢詩・和歌・俳諧

軍書とその延長線上にある実録を中心に、蔵書と読書の身分的位相をあらあら述べてきた。これに今回のシンポジウムで取り上げられた漢詩・和歌・俳諧の営みはどうつながるのか、付言しておきたい。

この点については、大名の文事の研究をリードしてきた井上敏幸の最近の発言が注目される。近年とみに大名家の資料調査は進んだが、その膨大な資料の総量を前にして、数量の計算に終始するだけでない、別途の研究方法として、大名の文事の核としては、武事を忘れず、文事に励み、「道」の修養と「徳行」の実践というモラルを見定めるべきであるとの提言である<sup>(注19)</sup>。本稿では、その「武事」に焦点を当てて専ら述べてきたことになるが、「道」の修養と「徳行」の実践の一部として、漢詩・和歌・俳諧は捉えられるべきものであろう。その時、重要な視点となるのは、江戸のモラルが、決して近代的な、思弁的あるいは抽象的

なものではなかったという点にある。江戸の文明にあつては、美と礼節はパッケージとして可視化されるものであり、芸能に近い形で、「会」の中でその江戸的モラルの絆が文芸の温床であつたことが最近指摘されている<sup>(注20)</sup>。

この問題は大名家に限らない。今回の蔵書調査の対象となつた矢口家・勝侯家のような地方名家の場合、旧派俳諧の頭目春秋庵幹雄にいずれも師事している点が注目される<sup>(注21)</sup>。矢口家の克明な日記には、天候の記録が欠かさず記され、天候の予測に供する易書や、神道と祭祀に關する書は、農耕にかかわる書とともに多く残る。ここには、百姓に字を教え、農事を指導し、天候を予測し、豊作を祈る日常とその延長線上に、俳諧の遊びがあつたことが想定される。

彼らの師であつた幹雄は、近代に入つて、キリスト教の蔓延を防ぐ文化政策の先兵として俳諧教導職を政府から拝命し、芭蕉の神格化に寄与していくが、文学の視点から見れば、退廃に過ぎないこの現象も、近世社会における文芸の位置という関心から見れば、見逃せない現象と言えるだろう。

#### 注

(1) 井上泰至『近世刊行軍書論 教訓・娯楽・考証』(笠間書院、二〇一四年)。

(2) 渡辺浩『東アジアの王権と思想』(東京大学出版会、一九九七年)「I 〔御威光〕と象徴―徳川政治体制の一側面」

(3) 大名蔵書の中で、軍書が核になることは、注(1)に収めた刊行軍書の



年表作りを行った際、実感したことである。

- (4) 太田尚充『八戸藩の武芸』（八戸市立図書館市史編纂室、二〇一三年）
- (5) 兵藤裕己『物語・オーラリティ・共同体 新語り物序説』（ひつじ書房、二〇〇二年）I・iv 武家神話としての平家物語。なお、兵藤はここで、家康もまた、將軍宣下を受け、朝廷では「新田殿」と呼ばれ、その同じ慶長八年（一六〇三）、当道の保護を行う一方で、赤松法印の『太平記』講釈を聞いた伝え（『我衣』）を紹介し、そこに近世国家のフィクションな枠組みの始発を指摘している。
- (6) 井上泰至『侍による歴史読み物』（田中康二と共編『江戸の文学史と思想史』ペリかん社、二〇一一年）、梶原正昭『戦国軍記の展望』（『室町・戦国軍記の展望』和泉書院、二〇〇〇年）。
- (7) 国文学研究資料館基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」矢口丹波記念文庫担当チーム「矢口丹波記念文庫蔵書目録」（『調査報告研究』三四、二〇一四年三月）。
- (8) 以下、依田長安に関する情報は、既に、横田冬彦『平人百姓』依田長安の読書（『一橋論叢』一三四、二〇〇五年一〇月）に詳しい。
- (9) 山本英二『浪人の由緒と伝説』（『国文学解釈と鑑賞』七〇・一〇、二〇〇五年一〇月）。
- (10) 小池喜明『葉隠 武士と「奉公」』（講談社学術文庫、一九九九年）。
- (11) 若尾政希『「太平記読み」の時代 近世政治思想史の構想』（平凡社ライブラリー、二〇一三年）『第三部 「太平記読み」と民衆の政治意識』。
- (12) 深谷克己『深谷克己近世史論集』第一巻（校倉書房、二〇〇九年）、横田冬彦『近世村落社会における〈知〉の問題』（『ヒストリア』一五九、一九九八年）、若尾政希『書物の思想史』研究序説―近世の上層農民の思想形成と書物―（『一橋論叢』一三四、二〇〇五年）、小林文雄『近世後期における「蔵書の家」の社会的機能について』（『歴史』七六、一九九一年）。

- (13) 神津武男『浄瑠璃本のベストセラー』（『文学』一二二、二〇一一年三月）。
- (14) 『近世儒家文集集成 第十三巻 鷲峰林学士文集 下』（ペリかん社、一九九七年）六〇〇～六〇一頁。
- (15) 加美宏『形成期の太平記読み―「家乗」の記事を中心に』（『国語と国文学』六二・十一、一九八五年十一月）。
- (16) 井上泰至『サムライの書斎 近世武家文人列伝』Ⅲ 軍記への情熱の根源 小林正甫（ペリかん社、二〇〇七年）。
- (17) 紅林健志『高崎矢口家における筆写活動』（『調査報告研究』三四、二〇一四年三月）。
- (18) 井上泰至『江戸の発禁本』（角川選書、二〇一三年）『第六章取り締まられた仮想戦記』。
- (19) 井上敏幸『「大名の文事」の研究について』（『近世文藝』百号、二〇一四年七月）。
- (20) 池上英子『美と礼節の絆』（NTT出版、二〇〇五年）
- (21) 森澤多美子『素描・滝之本連水』（大輪靖宏編『江戸文学の冒険』翰林書房、二〇〇七年）、金田房子『矢口一多年譜稿』（『国文学研究資料館紀要』三九、二〇一三年三月）。

※本稿の1、および2・1は、「写本軍書の機能」（『日本文学』七三六、二〇一四年十月）に発表したものである。